

「関東大震災ジエノサイド100年」テーマに金性済氏

ネット平和宗教者
院内集会

虐殺許さない人道の防波堤を

100年前の関東大震災時に起きてしまった朝鮮人虐殺事件と、その証拠隠滅に

対する二重の国家責任放棄が、今の日本社会に何をもたらしているのか？ 平和をつくり出す宗教者

ネット主催の院内集会が9月21日、東京・千代田区永田町の参議院第2議員会館会議室で開かれた。金性済（キム・ソンジェ）氏が「関東大震災ジエノサイド100年」をテーマにした講演を行った。【中田 朗】

最初1923年9月1日に何が起きていたのかについて語った。「地震発生後の午後には赤池濃警視総監、後藤文夫内務省警保局長が水野錬太郎内務大臣へ戒厳令施行を提案し、翌日、摂政裕仁が戒厳令を裁可。敵としての「不逞（ふてい）鮮人」討伐へのお墨付きを得て、「朝鮮人暴動」の事実確認もないうまま、東京・関東に居住し働く朝鮮人への虐殺が広がっていった」

「だが、3日目あたりから、朝鮮人が暴動を起こしたという形跡が全く見当たらないということが分かってきた。5日に山本権兵衛総理から『内閣告諭』が出されるが、第2号では、一部不逞鮮人の暴動があるが、全てではない、こんなことが諸外国に知られたら大変なことになる、だからほどほどに、といった内容。19日から10月末まで自警団の虐殺加担者が検挙されたが、司法省は9月11日の臨時震災救護事務局警備部司法委員会の方針に従い、(1)朝鮮人犯罪を既成事実とすること、(2)自警団員の全員検挙を放棄すること、とした。その結果、自警団裁判の実刑被告の多くは翌年1月26日の皇太子の結婚の際、恩赦を受けた。つまり、虐殺に対する司法の正義は最初から放棄する建前上の裁判だった。しかも、流言飛語を拡散させ、朝鮮人虐殺を引き起こした内務省、軍、官憲は、むしろその「沈黙化に努めた」という立場にすり替わっていた」

「誰も責任を取らないという無責任循環の仕組みに、関東大震災朝鮮人虐殺の現実を知りながら、口にせず、見なかったことにし、沈黙せざるを得なかった現実を忘れてはいけない。朝鮮人狩りをする自警団に対し『バカなことはやめろ。自分が何をしていいのか、後で何が問われるのかわかるか。目を覚ませ』と言いつ返すカウンターがいなかったことになる。あれは100年前の出来事、今は大丈夫と、この日本社会で言えるか」

金氏は、昨年9月JR赤羽駅のホームに「朝鮮人コロス会」という落書きが発見されたことに触れ、「100年目の出来事は今と地続きである」と指摘。「このようなジエノサイド、ヘイトを許さないために、歓待、友愛といった人道の防波堤で愚かな行為を食い止めていく。その必要を再確認することが、追悼集会の本質だ」と結んだ。

100年前の朝鮮人虐殺現場の写真を見せながら話す金氏



100年前の朝鮮人虐殺現場の写真を見せながら話す金氏